

現地視察における主な質疑応答

1. 国有林104・105林班

(1) 保安課の説明概要

現在の位置は現地視察資料（以下「資料」という。）3ページ①のところであり、標高は約70メートル、正面の国有林104林班までの水平距離は約200メートルである。

ここからは国有林105林班は見えない。資料3ページに国有林の境界線を赤色で示したが、見えている森林のすべてが国有林ではなく、一部は民有林である。

国有林からの砂利採取については、国有林100林班において昭和41年から昭和54年まで当時の千葉営林署が直営で採取した。昭和48年12月に千葉県知事が千葉営林署に対して採取の中止を要望し、昭和49年には千葉県土石採取対策審議会が公共機関による採取の禁止を知事に建議した。

国有林104林班からの砂利採取は、昭和63年1月に東京湾横断道路建設事業への供給のため、東京湾横断道路(株)等からの採取要望を受け、土石採取対策審議会へ諮問し、「本県の発展に関連の深い公共性の高いプロジェクトに使用すること」等を条件とした答申に基づき認可した。

平成元年9月から浅間山開発(株)等関係6社が採取を開始し、平成6年2月で当初予定量（1,220万立法メートル）を下回り終了した。その後、採取場の法面整形等を図りながら採取し、平成14年3月をもって終了した。

採取後の植栽緑化は、地権者である林野庁の指導を受けて実施した。法面の傾斜を35度（1：1.4）に整形し、整形面の安定度を高めるため、ベンチ高さ6メートル毎に3メートル幅のステップを設け、さらにステップ5段毎に6メートル幅のステップを設けた。5ページの図1に模式図を示したが、平均勾配は約26度で民有地における法面に比べ、かなり緩やかな勾配となり、安定度も高くなっている。

植栽した樹種は、多種多様な森林に復元しようという考えから、地元千葉県にある広葉樹を主体に植林したと聞いている。もともと国有林104林班は、スギ、ヒノキ、アカマツの造林地である。

(2) 質疑応答の概要

(質問) 国有林105林班は、マザー牧場まで広がっているが、今回審議の対象となっている国有林105林班の採取区域は、マザー牧場の方の奥まで入らないということでもいいのか。

(回答) 事業者が計画している採取区域は、資料3ページ青色の点線で示しているように国有林105林班のうち、マザー牧場に隣接している区域は含まれていない。

(質問) 今回の採取区域は、当時林野庁が大手6社に対して許可した範囲内ということか。

(回答) 当時は国有林104林班のほぼ全部と民有地が計画地となっており、国有林105林班は含まれていなかった。

(質問) 砂利を採取すると、この浅間山採取跡地のように、植栽もせず荒れた土地になってしまうのか。

(回答) この浅間山は開発目的で砂利採取しており、当時、採取後の植林は考えていなかった。

(質問) 植林したところは、採取することができないのか。

(回答) 採取できるかどうかは地主との関係、権原を与えるかどうか、また、砂利採取法の要件を満たすかどうかによる。

(意見) 浅間山砂利採取跡地が荒地のままほったらかしであるとか、ここが(国有林104林班と105林班が山砂採取を認めると採取後に)このようになってしまおうという人が多いが、そうではない。法に基づいて千葉県認可をとってここ(浅間山採取跡地)を開発するという事で植林をしない状態が続いているわけであり、今の状況は開発予定地である。ここ(浅間山採取跡地)がほったらかしだと言われて誤解され、地元としては迷惑している。ここを開発することは、千葉県の発展につながると思う。

(説明) 浅間山は宅地や工業団地を造成する目的で開発が行われた。

(質問) 次の計画は再度植林した山を残して山砂採取するという計画か。

(回答) 採取区域として、資料3ページで青い点線の地域が考えられている。

(質問) 手前の山を残して向こう側を採り、向こう側が平らになるということか。

(回答) 実際の採取方法など詳細な計画についてはまだ把握していない。

(質問) 何年間でこのような(浅間山採取跡地)状況になったのか。

(回答) 浅間山砂利採取は、昭和46年から昭和55年の9年間で行われた。

(意見) 浅間山の砂利採取では、東京湾の埋立て工事に利用され、需要が多かったため9~10年間で一つの山がなくなったのは事実だ。今回は、コンクリートの骨材として利用されるので、50年くらいは採取することができる。

(質問) 正面に見える斜面は、何年前に植林されたのか。

(回答) 植栽は15～16年前に始まり、5年ほど前に終了している。

(質問) かなり植栽緑化に費用をかけているようだが、コストはどのくらいか。

(回答) 緑化費用は1ヘクタール当たり3000万円くらいで、民有地の場合と比べ1桁多く費用がかかっていると聞いている。国有林のため林野庁から多種多様な樹種の植栽や法面の整形について指導があったと聞いている。

2. 砂利採取後の森林復元状況（国有林100林班）

(1) 千葉森林管理事務所の説明概要

不動谷国有林100林班の約30ヘクタールについては、昭和41年度から昭和54年度まで、当時の千葉営林署鬼泪山製品事業所が山砂採取を行った箇所である。

採取跡地の緑化については、早期にしかも確実にを行う必要があり、昭和43年から山砂採取と併行して開始し、最終的には昭和60年に完了した。植栽樹種はスギ、ヒノキ、クロマツ及びコバハンノキ等の広葉樹となっている。

植栽木は現在、25年生から42年生の林分となっており、クロマツは松くい虫による被害を受けたものの、スギ、ヒノキ、広葉樹は良好な生育状況となっている。今後、保育間伐等の森林整備を実施していくこととしている。

次に、当時実施した緑化方法の概要は、3段階で実行している。

最初に、山砂採取前に取り除いた表土を採取跡地に埋めもどし、深さ60センチメートルまで耕耘を行った。

耕耘後、山砂採取跡地の土壌改良と地表の土砂が流れ出るのを防ぐため、ハイランドベントグラス等の種子を播いて、草を生やしている。

最後にスギ、ヒノキ、クロマツ等の植栽をした。直径80センチメートル、深さ70センチメートルの植穴を掘り、その中に牛肥、バーク堆肥を入れ、その上に良質な表土のみで客土を行い、ヘクタール当たり約3,000本を植栽した。

(2) 質疑応答の概要

(質問) 採取が終わった後の緑化については、採取前に取り除いて保管してあった表土を使用するということで、世間で言われるようないわゆる残土を入れるとか産業廃棄物を入れるとかのことは、国有林については100パーセントないと考えてよいか。

(回答) ここではそのようなことはない。採取前に取り除いた表土を入れていると聞いている。

3. 富津市上水道水源（大佐和井戸）

(1) 富津市水道部の説明概要

富津市水道部では、現在3種類の水源を利用して富津市内に上水道を供給している。この3種類の水源は君津広域水道企業団からの受水、地下水、表流水である。地下水である大佐和井戸と表流水である関山用水がここの宝竜寺地先の場所にある。

目の前の大佐和井戸は、4号井である。この井戸は宝竜寺地先を中心に8本の井戸があり、ここを中心に半径約1キロメートルの範囲にある。そのうち2本が休止、1本が予備で、現在は5本の井戸で運用を行っている。

大佐和井戸は、昭和42年から昭和53年にかけて設置した。今、4号井を見ていただいているが、他の井戸もほとんど同じような形で地形によってフェンスの形は違うが建屋の大きさや構造はほとんど同じである。井戸の深さは100メートル、井戸の口径は350ミリメートルである。中間地点の40～50メートルの深さから深井戸用の水中ポンプで揚水を行っている。

揚水量は、地元11の区域と覚書をかわして日量5,000立方メートル以下となっている。平成20年度の日平均揚水量は、4,052立方メートルである。

井戸の水位については、1週間に1度測定しており、気候等の変化による変動はみられるが、揚水量に影響するようなことはこれまでなく、また、水質についても良好で塩素滅菌のみ行って給水している。

(2) 質疑応答の概要

(質問) 水位はどのくらいで、揚水した場合どのくらい水位は下がるのか。

(回答) 水位は17～20メートルくらいで、揚水を始めるとわずかに下がるが、すぐに戻る。

(質問) 5～6メートルくらい下がるのか。

(回答) それほどは下らない。

(質問) 鬼泪山国有林の山砂採取とこの井戸との相関関係はあるか。

(回答) 明確にはわからない。

(質問) 浅間山の砂利採取の影響はあったか。

(回答) 年間の雨量による変化は見られるが、浅間山砂利採取との相関はないと考えている。

(意見) 君津市の久留里地区の井戸は500メートルの深さだ。ここの井戸は100メートルの深さで浅く、汲み上げも深さ40メートルぐらい、また千葉県地層は南から東京湾に向かって下がっているの、浅間山砂利採取開発の影響は今までないと理解している。

4. 富津市上水道水源（関山用水）

(1) 富津市水道部の説明概要

関山用水は、今から190年以上前から佐貫地区を中心に農業用水として利用されている。

安定的な水源であることから、農閑期の9月から翌年の3月までの7か月の間、上水道の水源として、ここから約3.5キロメートル離れたところにある亀田浄水場に直接、管路にて導水し、原水として利用している。また、農繁期についても、ここから約4キロメートル離れたところにある小久保ダムに貯水して利用している。このことから1年を通して、この関山用水を利用している。

関山用水の利用については、地元及び7つの水利組合等との覚書により、取水量を日量1万立方メートル以下としている。

実際の取水量は、浄水施設等の関係から平成20年度の日平均で2,555立方メートルとなっている。

取水地点での流量測定は不定期であるが行っている。小久保ダムの運用を開始した昭和62年頃で日量約1万立方メートルであったが、その後、上流部の土砂崩落等によるものと思われるが、平成13年頃から日量約6,000立方メートルとなっている。これは流量が減ったということではなく周辺の状況から取水口まで至る量が減ったと理解している。

水源の水質としては、透明度も高く良好な状態である。

(2) 質疑応答の概要

(質問) 従前まで1万立方メートルだった水量が6,000立方メートルに減った原因は、途中で土砂崩落があって関山用水に流れてこなくなったということでしょうか。

また、その差の4,000立方メートルというのは、地下水として浸透しているということでしょうか。

(回答) ここからはよく見えないが、200～300メートル上流に砂防ダムがある。その辺になると川の形態がだんだんなくなっている。災害や大雨で土砂崩落があったため1箇所に集中するような流れが失われたという状況で、流れが途中から分かれてしまい、ここに到達する量が少なくなったと理解している。

(質問) 鬼泪山国有林の砂利採取が、ここの水にどのような影響を与えるかという問題があるが、ここから鬼泪山国有林までどのくらい距離があるか。

(回答) 国有林104林班まで、約3キロメートルくらいである。

(質問) 鬼泪山国有林を山砂採取した場合、水量への影響はどのくらいと考えているか。

(回答) よくわからない。

(質問) 関山用水に流れてくる水は、ほとんどが表流水ということか。

(回答) そのとおりだが、表流水がどこからスタートしているのか、また、どこから湧いているのか、どこから集まってくるのか、よくわからない。

(質問) 水源の上流方向は地形からみると鹿野山方向と考えられる。国有林104林班の位置は鹿野山方向とは全く反対の方向ということでもいいか。

(回答) 方向はずれている。

(質問) この関山用水は江戸時代から利用されているが、富津市の水源として利用されるようになってから、水量のデータをとり始めたのはいつごろからか。

(回答) 取水を始めた昭和62年頃からである。

(質問) 浅間山の開発が終わった頃からのデータ、例えば水量の増減についてのデータはあるか。

(回答) 水量の増減は、それほどない。水量が減った原因は、土砂崩落等によるものと考えている。浅間山の開発と水量の関係は、よくわからない。

(質問) 長い歴史があつて、これが潤れたという話は聞いていないがどうか。

(回答) 水量は安定している。

(質問) 浅間山採取跡地の標高は70メートルくらいだが、この取水口の標高はどのくらいか。

(回答) 数値が手元がないので、後でお答えする。

※取水口の標高は49.9メートル